

東日本大震災在宅被災者にみる教訓「あのとき、こうしていたら」について

徳島大学	学生会員	○松家茉莉子	徳島大学	正会員	上月 康則
四国建設コンサルタント株式会社	非会員	河野 有咲	徳島大学	正会員	松重 摩耶
一般社団法人チーム王冠	非会員	伊藤 健哉	徳島大学	非会員	井若 和久
防災士・弁護士	非会員	堀井 秀知	徳島大学	正会員	山中 亮一

1. はじめに

近年、東日本大震災の被災者の中には、十分な支援が受けられず、生活再建の困難な状態にある在宅被災者¹⁾が多数いることが明らかになった。近い将来発生する可能性の高い南海トラフ巨大地震では、徳島県だけでも建物の全壊棟数 11 万、避難者数は 30 万人を超え、その 10 万人は在宅被災者であると想定²⁾されており、もし、適切な対処がなされなければ、膨大な数の生活再建困難者が発生すると思われる。そこで徳島県では、被災者一人ひとりに寄り添い支援する災害ケースマネジメント（DCM）を制度化し、訓練も実施している³⁾が、DCM の実効性を高めるためにはより多くの被災者の事例を整理し、困窮課題と対処方法を明らかにしておく必要がある。そこで本研究では、生活困窮予防の一助となる教訓を見いだすことを目的に、東日本大震災在宅被災者の DCM のアセスメントシートから困窮過程を図化し、困窮結果からのバックキャストिंगによって「もしも、あのとき、こうしていたら」という形式で教訓を抽出した。

2. 方法

東日本大震災発災後 4 年経っても困窮状態にあった石巻市と女川町の在宅被災者 174 世帯を対象に、一般社団法人チーム王冠と仙台弁護士会による聞き取り調査が実施された⁴⁾。本研究では、20 世帯分のアセスメントシートから、被災世帯の属性、被災状況、支援内容などを整理し、困窮に至った過程を図化し、分析を行った。

3. 結果および考察

困窮過程に至った被災者事例（図 1）では、地震津波で家屋大規模半壊となり、震災ストレスにより体調を崩し、家屋修繕に貯蓄を使い果たした。図 2 の被災者事例では、地震津波で家屋全壊となり、寂しさや危険区域の移転問題における役所に対する不信感から心配事が募り不眠症状が現れた。

これらの図からもわかるように被災者の課題は複数あり、それぞれが関連しあうために、対策は重層的で、分野横断的である必要がある。また対処を行う時期によっても方法は異なる。本研究では、以上のことに配慮しつつ、平易に示すために、一つの被災者の課題に下線を引き、そこから得られた教訓案を一つ示すことにした結果、20 世帯の事例から 11 個の教訓を見いだすことができた（重複有り）（表 1）。また最も事例数が多かったのは、教訓 2「設置前からカウンセリングを受ける場所が設置されていたら」、教訓 8「自身の経済力に見合う生活復興プラン⁵⁾を立てていたら」、教訓 10「復興計画を公表する時に、復興計画のスケジュールを早急に周知し、住民と行政が話し合っていたら」であり、いずれも 4 事例だった。震災が起こる前に実施できる対策や教訓も多数あり、発災前から被災することをイメージし、生活再建できるように取り組むこと、また行政や地域との協働を呼びかけ、参加することの重要性を改めて指摘することができた。

4. おわりに

本研究では東日本大震災在宅被災者の生活困窮過程から 11 個の教訓を抽出できた。今後はさらに事例を増やすことで、生活再建に活かせる教訓を見だし、南海トラフ巨大地震発災後における徳島県の生活困窮予防の基礎資料とする。

謝辞 本研究は科研費 20K21059 の支援を受けて行われたものである。

参考文献

- 1) 一般社団法人チーム王冠 HP： <http://team-ohkan.net/> (2023-3-1)。
- 2) 徳島県：徳島県南海トラフ巨大地震被害想定（第二次）。
- 3) 井若和久，堀井秀知，上月康則，天羽誠二，内野輝明，湯浅雅志，阿部知幸，吉野哲一，中原優江：徳島県総合防災訓練での被災

者相談とその評価, 令和4年度自然災害フォーラム&21世紀の南海地震と防災, 第17巻, pp. 19-28, 2022.

4) 仙台弁護士会: 在宅被災者等戸別訪問型法律相談の結果報告, <https://senben.org/wp-content/uploads/2018/02/300208.pdf>, (2023-3-2)

5) 内閣府: 災害ケースマネジメントに関する取組事例集, <https://www.bousai.go.jp/taisaku/hisaisayagousei/case/pdf/zenpen.pdf>, (2023-3-1).

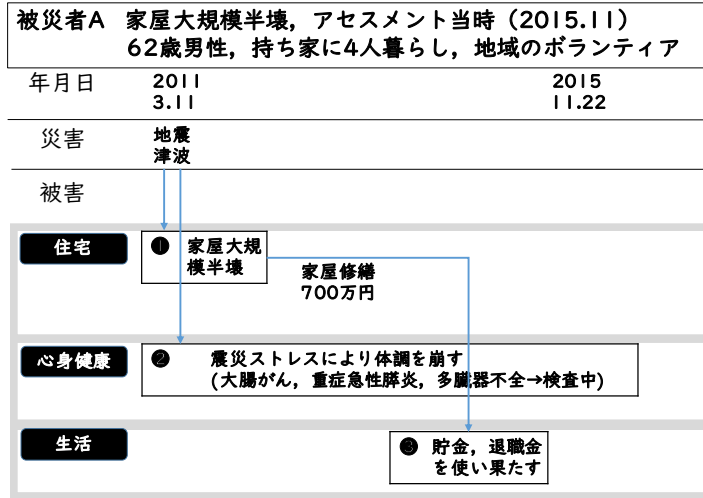


図1 被災者Aの困窮過程

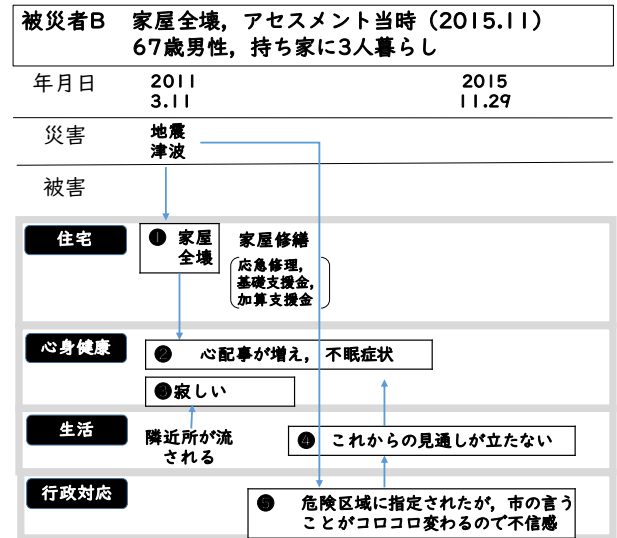


図2 被災者Bの困窮過程

表1 抽出された教訓

教訓	あのとき	被災者世帯の家族, 家屋被害, 困窮課題	こうしていたら こうされていたら	事例数
1	震災が起こる前	63歳女性で3人暮らし, 地震津波で家屋全壊。 <u>人付き合いが苦手</u> で孤立し, 精神的ストレスを1人で抱える。	地域のコミュニティの一員となり, 支えあう関係ができていたら	1
2		67歳男性で3人暮らし, 地震津波で家屋全壊。自宅が <u>危険区域に指定された</u> が, 役所の対応に一貫性がなく今後の見通しが立たない。	危険区域の利用方法, 制度を定め, 周知されていたら	3
3		65歳男性で2人暮らし, 地震津波で家屋大規模半壊。住宅再建の <u>制度を理解しておらず</u> 利用していない。	支援制度が周知され, 使えるようにしていたら	1
4		51歳男性で4人暮らし, 地震で家屋大規模半壊。 <u>生業の水産加工業再建に向け多額の借金をした</u> ため, 妻が精神的に不安定となった。	BCPを作成していたら	1
5	震災が起こった後	62歳男性で4人暮らし, 地震津波で家屋大規模半壊。震災後, <u>地域の支援活動</u> 。相談できる人がおらず精神的ストレスを1人で抱える。	カウンセリングが設置されていたら	4
6		79歳女性で1人暮らし, 地震津波で家屋全壊。認知症の傾向がある, <u>頼れる人がおらず孤立</u> 。不衛生な環境で生活し続ける。	在宅被災者への見守りがなされていたら	2
7	仕事を辞める前	55歳女性で3人暮らし, 地震津波で家屋全壊。同居の孫がトラウマを抱え, <u>自分以外に孫の面倒を見る人がいない</u> ために仕事をやめた。	託児, 保育などのサービスがあつたら	1
8	家屋修理の開始時	72歳男性で1人暮らし, 地震津波で家屋大規模半壊。家屋修繕のため, 支援金, 義援金, <u>老後の生活のための貯蓄も使い果たした</u> 。	自身の経済力に見合う生活復興プランを立てていたら	4
9	ローンを考えた時	84歳男性で6人暮らし, 地震津波で家屋全壊。震災前の3重ローンに加え, 震災後新たに2重ローンを抱え, <u>返済が困難</u> となった。	債務の減額や免除の制度が周知され, 知っていたら	1
10	復興計画の立案時	61歳男性で4人暮らし, 地震津波で家屋全壊。 <u>自宅が復興事業の対象になる</u> が役所の対応に精神的不安となり, 地域関係は悪化した。	復興事業案への合意形成が丁寧になされていたら	4
11	復興工事の開始前	63歳女性で1人暮らし, 地震で家屋全壊。 <u>海底のかさ上げ工事の土砂により, 生業の海藻漁ができなくなった</u> 。	工事の環境配慮と住民説明がなされていたら	1